世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『つらい仕事の日』

第 13 話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第13話「つらい仕事の日」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
マリエット
（アーメンガード）
（ロッティ）
モーリー
ジェームス
（ラビニア）

（ジェシー）
（ガートルード）
（ジェニファ）
（ダイアナ）
（リンダ）
（クリステル）
（デュファルジュ）

エミリー（人形）
シーザー（猫）

1

ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

——月光が天窓から射し込んでいる。

×　　×　　×

壁際の粗末なベッドに掛け、エミリーを抱きしめている黒リボンのセーラ。

セーラ「エミリー……私たち、今夜から、この屋根裏部屋と云うお部屋で、暮すことになったのよ……」

セーラ、殺風景な屋根裏部屋をみつめる。

セーラ「あなたがよく坐っていた揺り椅子も……私の勉強机も……もう私たちのものではないの……ここはもう別な世界なのよ」

風が渡り、窓枠をガタガタさせる。

セーラ「淋しいけど……辛いけど……私、もう、泣いたりしないわ……泣いてたら……泣いてたら、私たち……駄目になって

しまうのよ……」

耐えるセーラ、その眼に涙が光る。

ふと階段下から、ゴトリ、ゴトリと物音が聞えて来る。

はっと顔を上げ、耳をすますセーラ。

——ゴトリ、ゴトリと近づく木靴の音。

セーラの顔に、ぱっと喜色が浮び、ドアを見る。

セーラ「ベッキーだわ……エミリー、ベッキーがお仕事が終って帰って来たのよ!」

思わず立上るセーラ——

——近づいた足音が、ふっと消える。

ドア下から洩れ込んでいる仄かな灯り。

——微かなすすり泣きの声が聞える。

セーラ「ベッキー……?」

怪訝にドアを見て声をかけるセーラ。

2

同・ドアの外（夜）

短いローソクの燭台を手にしたベッキーが、前掛でそっと涙を拭うと、おずおずとノックする。

セーラの声「は、はい……」

3

同・屋根裏部屋（夜）

ギキッとドアが開き、涙顔のベッキーが顔をのぞかせる。

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ、急いで近づく。

ベッキー「お嬢様……あの……私……いいでしょうか……ちょっとだけ……」

セーラ「ベッキー……やっぱり来て下さったのね……さ、入って……」

ベッキーを招じ入れる。

ベッキー、入ると、荒れた室内を見廻す。

ベッキー「こんな……こんなひどいお部屋に……ローソクもなしに、おひとりで……」

ベッキー、前掛けで涙を拭うと、燭台を木箱の上に置く。

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「お嬢様……私……私、今日一日、ずっと泣いてたんでございます。台所で……」

セーラ「え……」

ベッキー「お嬢様が……こんなめに逢わされるなんて……いくらなんでも、ひどすぎます……」

ベッキー、前掛を顔にあて、声をあげて泣き出す――

セーラ「ベッキー……」
セーラ、優しくベッキーの肩を抱く。
セーラ「有難う、ベッキー……私のために、そんなに心配してくれて……」
ベッキー「私、お嬢様がお気の毒で……」
セーラ、静かに首を振る。
セーラ「ベッキー……私、前に、あなたに話した事があったわ」
ベッキー「え……」
セーラ「私も、あなたも、同じ女の子なんだって……」

4 フラッシュ（回想・8話より）

かつてのセーラの部屋で——美しいダンス服のセーラと、ベッキー。
セーラ「だって、私もあなたも、同じ女の子でしょ……私が今のセ

ーラで、あなたが今のベッキーだなんて、生れた時のただの偶然だと思うの」

ベッキー「グウゼン……？」

セーラ「そうよ……だって、もしかしたら、私があなたで、あなたが私に生れてたかも知れないでしょ」

ベッキー「そ、そんな、お嬢様……」

5

同・屋根裏部屋（夜）

粗末な服のセーラと、ベッキーが、並んでベッドに掛けている。

セーラ「……あの時は、深く考えていた訳ではなかったけれど、私には今、それが本当だったたって、はっきり判ってきたの……」

ベッキー、茫然とセーラを見る。

セーラ「だって、ほら……私は、この通りすっかり変ってしまったわ……あなたとちっとも違わないわ……私も、屋根裏部屋に住む同じ女の子なのよ……だから、ベッキー、もう私の為に心配して下さらなくてもいいのよ」

ベッキー「お嬢様……」

ベッキー、激しく涙の顔を横に振る。

ベッキー「お嬢様……お嬢様は、変ったりなさってなんかいませんん……どんな事が起ったたって、お嬢様は、プリンセス様なんです……いいえ、誰がどう云ったたって、私だけは、そう決めてるんでございます……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「私、明日から、毎朝お嬢様のお世話に参ります……それから（と室内を見廻し）このお部屋のお掃除もしなくては……」

セーラ「そんな……」

ベッキー「そうそう、大事なものをお持ちしました」
ベッキー、提げて来た布袋から、リボンのついた本や、
焼物の子馬や、オカリナを取り出す。
ベッキー「お誕生パーティでお忘れになって……私、後片附けの時
気がついて、隠しておいたんです」
セーラ「まあ……」
ベッキー「それかり、マリエットさんに頼んで、お嬢様の着がえを
……この中に……」
布袋をセーラに渡す。
セーラ「有難う、ベッキー……」
ベッキー「では、お嬢様、明日またお日様と一緒に起きなければな
りませんので……」
ベッキー、立上る。
ベッキー「なにか御用がありましたら、この壁を叩いて下さいまし」
ベッキー、ベッドを寄せた壁を叩く。

ベッキー「この壁の向う側に、私のベッドがございます。いつでも飛んで参りますから」

セーラ「有難う……ベッキー……」

ベッキー「では、ローソクを置いて参りますから……」

セーラ「でも、あなたが……」

ベッキー「いいえ、私は、暗いのはなれてますから……では、おやすみなさいませ、お嬢様……」

セーラ「おやすみ、ベッキー……それから、本当に有難う……」

ベッキー、ドアを出て行く。

再びベッドに掛け、置いてあるリボンの小箱をあける

セーラ――中から、ロッティのくれた焼物の小馬が出て来る。

6
フラッシュ（回想・十一話より）

食堂の誕生パーティで、セーラにその小馬をプレゼントするロッティ。

7

同・屋根裏部屋（夜）

小馬をみつめたセーラ、本をとる。

8

フラッシュ（回想・十一話より）

その本をセーラにプレゼントするアーメンガード――

9

同・屋根裏部屋（夜）

本をみつめたセーラ、オカリナを手にとる。

10

フラッシュ（回想・十一話より）

遊戯室のパーティで、おずおずとセーラにそのオカリナをプレゼントするピーター――

11

同・屋根裏部屋（夜）

じっと、オカリナをみつめるセーラ、呟く――

セーラ「ロッティとも……アーメンガードとも……もうお友だちではいられなくなってしまったんだわ……それに、ピーターまで……」

その時――隣室から、コツコツと壁を叩く音。

セーラ、はっと見る――ためらったが、そっと壁を叩き返す。

コツコツ……。

12

同・隣りのベッキーの部屋（夜）

月光の中で――壁に寄せたベッドに入ったベッキーが、
その音を確かめ、ほっと安堵の色を浮べる。
毛布をかぶり、ベッドにもぐり込む。

13

同・屋根裏部屋（夜）

ほっと安らぎの微笑を浮べるセーラ、呟く――
セーラ「ベッキーがいてくれるわ……今の私には、ベッキーだけが、
最后のお友だちなんだわ……」

× × ×

ジジジ……と音がして、木箱の上の燭台のローソクが、
またたいて燃えつきる。

× × ×

はっと見るセーラ——
月光を、早い雲がよぎり、風が音を立てる。
何処からか、ネズミの走る音が聞え、騒がしくネズミの鳴き声が聞え出す。
脅えるセーラ、急いでボロ靴を脱ぎ、ベッドの上に足を引っ込める。
ボロ毛布を身にまきつけ、壁に退いて蹲まるセーラ——
ネズミの鳴き声が一そう激しくなって来る。
——暗い中で、脅えるセーラ。

14 朝焼けのロンドン（早朝）

——屋根屋根が遠く連なり、
——セントポール寺院が遠望される。
遠く東の空が陽に染りはじめている。

――無数のスズメの声がかぶる。

15

ミンチン女学院の屋根（早朝）

群がるスズメの群――
騒々しい朝の啼き声――

16

同・屋根裏部屋（早朝）

――明るくなり始めた室内。

×　　　×　　　×

ベッドに――昨夜の姿のまま、毛布をまきつけ、壁にもたれて眠っているセーラ。

――スズメの啼き声が拡大する。

その声に、ふっと眼をさますセーラ、辺りを見廻し、

そこが屋根裏部屋である事を思い出す。

セーラ「そうだわ……今日から、ここが私の部屋なんだわ」

そっとベッドを降りると、スズメの声に天窓を見上げる。

——天窓に見えるスズメの姿。

セーラ、その真下に置かれている例の木箱に近づくと、そっとその上にのぼる。

立ち上り、天窓を押し上げてみる——丁度、セーラの顔がのぞく。

×　　×　　×

17　同・屋根の上（早朝）

パッとスズメたちが飛び上る。

天窓から、そっと覗いているセーラ。

スズメたち、またさえずりながら舞い降りて来る——

18 同・屋根裏部屋（早朝）

セーラ、思わず微笑する。

その時、ボウッ……と汽笛の音。

セーラ、その方を見る。

× × ×

裏町の屋根屋根が続く向うに、思いがけない近さで走って行く蒸気機関車と列車が見おろせる——

× × ×

セーラ、そっと天窓をおろし、降りようとする——木箱が傾き、セーラ、どっと床に転げ落ちる。

セーラ「痛っ……！」

忽ち、もうもうと舞い上るほこり。

ふと隣りの壁が、コツコツと叩かれる。
セーラ、はっと見る。
またコツコツと叩く音――
セーラ、急いで起き上ると、壁に行き、コツコツと叩く。
セーラ「大丈夫よ、ベッキー……もう起きているわ」

19 同・ベッキーの部屋（早朝）

既にメイド姿のベッキー、ほっと壁を離れる。

20 同・屋根裏部屋（早朝）

木箱を直し、服のホコリを払うセーラ。
ドアにノックの音――

セーラ「（振返り）はい……」

ギギッとドアが開き、ベッキーが覗く。

ベッキー「お早うございます、お嬢様……」

セーラ「お早う、ベッキー」

ホウキと雑巾を手に入って来るベッキー。

ベッキー「あの、お召しかえのお手伝いを……」

セーラ「まあ、ベッキーったら……私がこの通り着たきりだってこと、まだ判ってないのね」

ベッキー「あ、そうでございましたね」

二人、思わず笑う――

ベッキー「では、お部屋のお掃除の方を……」

セーラ「いいのよ、ベッキー……これからはなんでも自分でやらなければいけないんですもの、ここは私がやるわ」

ベッキー「でも、お嬢様は、ご自分でお掃除などした事が……」

セーラ「大丈夫、出来ると思うわ……それより、あなたは下でお仕

事が始まる時間でしょ」
ベッキー「は、はい……モリーさんやジェームスさんが起きて来る前に、台所の火を起したり、掃除を……」
セーラ「では、もう行かなくては……」
ベッキー「はい……では、お嬢様、申し訳ございませんですが、これを……」
セーラにホウキと雑巾を渡すと、出て行く。
見送ったセーラ、元気よく掃きはじめる。
――忽ち、もうもうたるホコリ。
セーラ、ホコリの中で咳込む
――C・M――

21 同・二階への踊り場（朝）

上って来たアメリアが振鈴を鳴らす。

22 同・屋根裏部屋（朝）

すっかり掃除の終った部屋に、その音が伝って来る。
壁際に寄せた木箱の上に、父と母の写真額を飾っていたセーラ、はっと耳をすませる。

セーラ「授業が始まる時間だわ……」

セーラ、吐息して、木箱に坐らせていたエミリーを抱き上げる。

セーラ「でも、もう私たちには、関係ない事なのよ」

セーラ、整頓されたベッドに行くと、エミリーを坐らせる。

セーラ「エミリー……私、院長先生の所にうかがわなくてはいけないの……そうよ、私、今日から働くの……だから、淋しいでしょうけど、独りでここで待っていてね……」

セーラ、そっと立上る。

23 同・ドアの外

出て来るセーラ、階段口へ——

24 同・三階の廊下

ドアが開き、セーラが出て来る。

かつてのセーラの部屋の前に来て、ふっと立停る。

——開け放たれたままのドア。

——ガランとした室内に物音。

セーラ「マリエット……？」
セーラ、思わずそっと部屋に入る。

25

同・セーラの部屋

茫然と見るセーラ――
シーザーがのっそりと出て行く。
見廻すセーラ――
――家具もジュータンも消えたかつての自室。
セーラ、開いている窓に気づき、近づく。
見おろして、はっとなる。
×　×　×
玄関前に停った大型馬車に積み込まれているかつての
セーラの家具、ジュータン。

26 同・表

その馬車がゆっくり出発する――

27 同・セーラの部屋

じっと見送ったセーラ、小さく吐息して窓辺を離れる。

28 同・三階の廊下

部屋から出て来るセーラ――
シーザーが、待ち受けていたように、階段へ誘導する。

29 同・一階の廊下

シーザーと、続いて降りて来るセーラ。
院長室のドアが開く――
思わず立停るセーラ。
シーザーが素早くそのドアに走り込む。
そのドアから、出て来る行李を提げた旅姿のマリエット。

セーラ「（驚く）マリエット……」
マリエットも振返り、はっとセーラに気づく。

マリエット「お嬢様……」
セーラ、急いで近づく。

セーラ「マリエット……どこへ行くの」

マリエット「は、はい……私、院長先生に、ここをやめるように申されまして……」

セーラ「え……」

マリエット「それで、どこかで仕事をみつけるつもりで……」

セーラ「許して、マリエット……やっぱり、私のせいで……」

マリエット「とんでもございません、お嬢様のせいだなんて………（涙声）私、お嬢様のお傍にいられた事だけでも、どんなに感謝していたか知れないんです」

セーラ「マリエット……」

マリエット「私、お嬢様の事が、悲しくて……」

カチリとドアが開き、ミンチンが現われる。

はっとなるセーラとマリエット――

ミンチン「マリエット、なにをしているんです」

マリエット「は、はい……お嬢様と、お別れを……」

ミンチン「お前はもう、この子の専属メイドではないんです。早く出てお行き」

マリエット「は、はい……では、お嬢様、お元気で……」

マリエット、泣き顔で地下への階段に消える。

凝然と立尽して見送るセーラ。

ミンチン「（ジロリ）なぜ起きたら、さっさと私の所へ来ないのです」
セーラ「は、はい……」
ミンチン「なんです、いつまでもそんな黒いリボンなんかつけて」
セーラ「でも……これは、お父様の為に……」
ミンチン「フン、お前の父親は、破産して死んで、この学校にまで迷惑をかけたんですよ。そんなものをつけたって、誰が同情などするものですか。外しなさい」

セーラ、懸命に首を振る。

ミンチン「強情な子ね……お前がここにいられるのは、私のお情けだと云う事を忘れたんですか、外すんです」
セーラ「い、いやです……」

セーラ、必死に首のリボンを摑む。

憤然と大きく吐息するミンチン。

ミンチン「では、勝手にするがいい……さ、来るんです」

地下への階段口へ促す。
おずおずと続くセーラ――

30 同・表

地下からの階段を昇って来るマリエット、泣顔で振返る。
マリエット「お嬢様……さようなら……」
待っていた辻馬車に乗り込む。
走り去る辻馬車――

31 同・地下室の階段口

階段から、呼びつけたモリーとジェームスを前に、セーラを脇にしたミンチン。

ミンチン「モリー、ジェームス……この子は今日から、台所のメイドに使う事にしましたからね」
顔を見合せるモリーとジェームス。
ミンチン「遠慮はいりません。ベッキーと同じように、厳しく使うように……判りましたね」
モリー「は、はい、院長先生……」
ミンチン、裾をつまんで階段を去る。
再び顔を見合せるモリーとジェームス。
ジェームス「聞いたか、遠慮はいらねえだと」
モリー「ああ、ベッキーと同じようにだとさ」
ジェームス、取り残されて立つセーラに向き直る。
ジェームス「おい、お嬢さ……」
モリー「(小突く)馬鹿だね！　セーラでいいんだよ」
ジェームス「おっと、そうだった……セーラ」
セーラ「はい……」

ジェームス「へへ、悪くねえ気分だ……さ、これからたっぷりこき使ってやるからな」
セーラ「は、はい、ジェームスさん」
モリー「おいで！」
セーラ「はい、モリーさん……」

32 同・地下の食堂

テーブルに、女生徒たちの皿や食器が乱雑に残っている。
セーラを連れて来るモリー。
モリー「さ、昨日までのお前の友だちの後片づけをするんだよ」
セーラ「は、はい……」
モリー「食べ残しは、あとでお前の食事になるんだから、粗末にするんじゃないよ」

セーラ「はい……」

そこへ、ベッキーが籠を抱えて入って来る。

セーラの姿にはっとなる。

ベッキー「お嬢様……」

モリー、ジロリとベッキーを見る。

モリー「お嬢様だって?……フン、今日からこの子はお前と同じなんだよ。お嬢様だなんて私の前で呼んだら承知しないからね」

ベッキー「は、はい……」

モリー「さあさあ……二人とも早く片附けるんだよ」

ベッキーとセーラ、急いで皿や食器を籠に入れはじめる。

ニヤリと去るモリー――

33 同・食器洗場

山のような皿や食器を洗っているベッキーとセーラ。

ベッキーが小声で話かける。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「ベッキー……セーラでいいのよ」

ベッキー「はい……私、ここでは丁寧な口はききませんけど、気になさらないで下さいましね」

セーラ「ええ、判っているわ、ベッキー」

モリーが入って来る。

モリー「なにをお喋りしてるんだい。さ、セーラ、お前は廊下の掃除にかかるんだよ」

セーラ「は、はい……」

34 同・一階の廊下

重い水桶とモップを手に地下の階段を上って来るセー

ラ。

はっと立停る。

教室から聞えて来るフランス語の授業。

デュファルジュの声「…………」

女生徒たちの声「…………」

セーラの胸に悲しみがこみ上げる。

セーラのM「みんな勉強をしているんだわ……でも、私は働くしか……」

その時、院長室からアメリアが出て来ると振鈴を鳴らす。

はっと物蔭に引込むセーラ――

教室のドアが開き、デュファルジュが出て来る。

思わず顔を伏せるセーラ――

デュファルジュ、気づかずに前を通りすぎる。

続いて、わっと出て来るラビニア、ガートルード、ジ

ェシーたち。
一瞬、物蔭のセーラに気づき、立停る。
セーラもはっとラビニアたちを見る。
その時、院長室から出て来るミンチン。
ミンチン「なにをしているんです。さ、みんな行くんです」
ラビニア、ジェシー、ガートルード、それぞれにセーラに冷笑を浴せて通りすぎる。
気の毒そうにセーラを見て通りすぎるジェニファ、ダイアナ、リンダ、クリステルたち。
アーメンガード、立停り、なにか云いかけそうになるが、ミンチンを見て急いで通り抜ける。
セーラを見てベソをかきながら去って行くロッティ。
ミンチン「さ、早く教室の掃除をするんです」
セーラ「院長先生……お願いがあるんです」
セーラ、思い切って訴える。

セーラ「私、勉強がしたいんです。授業が終ったあと、教室で勉強する事をお許し頂けないでしょうか」

ミンチン「なにを馬鹿な！　お前は、働くことでここに置かせて貰ってるんですよ。さ、仕事をなさい！」

ミンチン、心配気に立つアメリアを促して院長室に入って行く。

――茫然と立尽すセーラ。

ミンチンの声「アメリア……セーラが他の生徒たちと親しくしたり、話をしたりしないよう厳しく注意なさい」

35

同・院長室

ミンチン「女の子は、あわれな物語が好きです。セーラが自分の身の上をロマンチックに聞かせたりしたら、他の生徒に悪影響がありますからね」

アメリア「は、はい、お姉様……」

36 同・廊下

じっと聞くセーラ、教室へ向う。

37 同・教室

机を拭くセーラ、その手が停る——

セーラのM「私、一人でも勉強するわ……でなければ私、くじけてしまうもの……」

おわり